

ありがとう

本校で育成すべき生徒の「資質・能力」

- | | |
|----------------------------|-------|
| (1) 勇気を持って、挑戦する力 | <強く> |
| (2) 主体的に判断し、より良く変容しようとする態度 | <正しく> |
| (3) ふるさとを愛し、社会に貢献しようとする姿勢 | <役立つ> |

県駅伝特集号

学校だより 第 8 号
令和元年 11 月 15 日発行
五島市立福江中学校
文責：校長・川端
☎ 72-6416

偉業達成!! 県駅伝【男子：優勝、女子：準優勝】



区間賞の貞方・出口

雪辱に燃える1区の田村



男子は12年ぶりの県制覇、女子は準優勝（11年ぶり）、男女Wでの九州大会出場と男子の全国大会出場。この結果は、県駅伝史上男女W優勝3校に次ぐ、まさしく快挙であり歴史に名を残す偉業と言えます。

女子アンカー木口選手が競り合いを抜け出して2位でゴールした瞬間と男子アンカーの夏井選手が独走状態でゴールした瞬間の会場のどよめきは、身震いがするほどの感動・感激と周りからの祝福の嵐と化しました。11/7（木）10:50、女子レースの号砲。1区小嶋日和選手は、冷静な判断でスタートは後方につけ自分のペースで走りきり自己ベストをマークしての15位で襷を2区へ。2区平松心響選手も自己ベストの走りです5人を抜き10位で3区へ。チーム唯一の3年生で2年前の悔しさを知る田中琴真主将は順位を2つ上げて8位。4区の川上夏希選手は1年生。初めての大会出場とは思えない快走、自己ベストのタイムをマークして6位でアンカーへ。5区の木口仁心選手が襷を受け取った時は、独走の1位桜が原中を除き10秒差の中に6チームの混戦状態。その混戦の中から区間2位の走り（自己ベスト）で他選手を凌駕し、3位に5秒差をつけてのゴール!! 見事な力走を見せ精根尽き果てた様子でしたが、達成感に満ちた姿が輝いて見えました。区間賞がない中での準優勝は、一人一人が自分の走りに責任と自信を示したチーム力の結果です。

男子は、12:30開始。1区は、今年のアンカーで胸差の2位と悔しさを人一倍味わった田村優選手。直前のスタート練習では、全選手ダッシュする勢いの中で一人だけ歩くような速さ。そして号砲。何と最後尾での走りに思わず「なぜ?」、何かのアクシデント……という不安感。ところがこれも用意周到の作戦。他の選手に惑わされることなく、4kmのペース配分を守り徐々に順位を上げて、32位から29人抜きの3位、自己ベストタイムで先頭に22秒差で2区へ襷をつなぎました。2区は、初めて県駅伝に出場した貞方勇人選手。初めてとは思えない冷静な走りで区間賞（自己ベスト）を獲得し、1秒差の2位で3区へ。3区は市駅伝大会では体調不良でAチームから外れた出口凛太郎選手。この県大会に合わせて調整してきた成果と昨年の経験を生かした走りで、2位を振り切り200m程の差をつける堂々の区間賞獲得。そして、4区は田端楓季選手。1年生の時から野球部と駅伝の練習に取り組み、着実に走力と自信をつけ区間4位の走りで2位との差を維持して5区へ。5区は唯一の2年生である中野一希選手。昨年の経験はあるものの、骨折で思うように走ることが出来なかったりハビリの期間を経験してようやく間に合った本番。区間3位で重責を果たしアンカーへ。6区アンカーは、この1年間黙々と練習に励みどんなことにも自分から模範を示してチームの結束を大事にしてきた主将の夏井翔大選手。選手だけでなく県大会に来ることが出来なかった部員全員の思いが繋がった襷を胸に、区間2位の走りで堂々と「優勝!・歓喜のフィニッシュ!!」

監督の葉山善信先生は、駅伝指導歴20年での悲願達成で感慨無量。大窄奈津子先生は、選手のメンタル面の支柱としての役割を全うしての大願成就。お二人の満面の笑みと涙は、選手同様にこれまでの苦悩が結実したことの安堵感と喜びのように映りました。選手・部員も監督も「ワン・チーム」おめでとう!!

【区間賞】五島勢4人

その光景は同郷の誇らしさと同時に、これまで五島のチームが切磋琢磨して築き上げてきた五島人の魂が開花したようにも感じ、富江中の女子の健闘も含めてねぎらいし賞賛したいと思います。

私は走る前不安でした。しかし、走り出すと楽しかったです。これからも九州大会に向けて新たな目標を立てて、全員で頑張ります。



小さな鳥の
大きな挑戦
福江
鬼魂
走れ
ハレ

テレビドラマでは、一話完結型が多い。主人公を中心として一つのストーリーが展開されていく。そして、一つ一つの話がつながって最後の結末を迎える。

今回の県駅伝大会の結果が、まさしくドラマであった。クライマックスが男女のゴールシーンではあったのだが、「県駅伝大会」という物語の続きを感じた。

ちょうど一年前、男子はゴール寸前での胸差の2位、外野はこの健闘を讀え喜んだ。しかし、選手や監督は違った。この無念を晴らすために、必ずや優勝を果たすための新たな挑戦を心に誓っていた。そして今回昨年の数cm差を二〇〇m以上も引き離しての優勝。ものの見事に雪辱を果たした。昨年の悔しさは、この喜びのブローグであったように感じる。

二年前、女子の3位は大健闘と賞賛された。特に、一年生アンカーで区間賞を獲得した選手にとっては、ただひたすらに力を出し切った結果であり祝福に甘んじて十分であった。しかし、心は違った。目の前にいた2位に迫いつけなかった悔しさの方が大きかった。あれから二年、三年生一人になってもあの時の借りを返したかった。もう少して届いた栄冠を今度は必ずつかみ取りたかった。そして、ついにその思いを後輩と共に果たせた。

何事にも結果が全て。特にスポーツの世界は。しかし、今回の結果を振り返って感じた正直な感想（物語のつづき）である。教育的に言えば、ここに至るまでの練習や生活面の過程を讀えたい。目標達成のために犠牲にしてきたことを、そのために得ることができた貴重なことを。

今回の結果が、新たな物語のスタートとなるかも知れない。否、「人生」というそれの物語はこれからも続いていく。

幸多かれ！

感謝！